

立正考古学 一九三〇—一九五九

坂 誥 秀 一

一

一五八〇（天正八）年に日蓮宗の教育機関として下総国飯高郷（現千葉県八日市場市飯高）に創設された「飯高檀林」を淵源とする立正大学は、一九二四（大正一三）年五月一七日付で大学令による大学として設立され、一九四九（昭和二四）年に新制立正大学として新しくスタートをきった。

その間、一八七二（明治五）年に檀林を廃して「日蓮宗宗教院」が設置され、東京芝・二本榎の承教寺内に開院された。ついで、一九〇四（明治三七）年にいたり「日蓮宗大学林」（専門部・高等科・中等科）と改組されて東京大崎の谷山ヶ丘（現東京都品川区大崎）の地に転じ、一九〇七（明治四〇）年には、「日蓮宗大学」（研究科・大学科―本科・予科―・中学科）と改められ、さらに一九二五（大正一四）年には「立正大学専門部」と改称され、前年に発足した立正大学に組織上吸収されたのである。

立正大学（旧制）には、文学部として、宗教学科・哲学科・社会学科・史学科・文学科及び予科・研究科が設置さ

れた。一方、専門部（旧日蓮宗大学）には、宗教科・国語漢文科・歴史地理科がおかれたが、あくる年には国語漢文科と歴史地理科を併せて高等師範科と改称されるにいたった。

立正大学の考古学は、文学部史学科と高等師範科（歴史地理専修）を核として呱呱の声をあげた。その当初は、もっぱら、文学部史学科を中心とするものであったが、その後、高等師範科（歴史地理専修）も加わって、次第に研究と教育の実をあげるようになっていった。

実際に考古学を冠した組織が生まれたのは、一九三〇（昭和五）年であった。その頃、立正大学には、原田淑人・石田茂作両先生が非常勤講師として教鞭をとられていた。両先生を顧問として「考古学懇談会」が発足したことは、立正大学における考古学研究の黎明を告げたものとして記録さるべきであろう。この会は後に「考古学研究会」と改称され、さらに、一九三二（昭和七）年には「立正大学考古学会」となり、機関誌『銅鐸』の創刊号を発行するにいたったのである。

立正大学考古学の淵源をたどると、一九三〇年の考古学懇談会、そして一九三二年の考古学会の発足に求めることができる。

いま（一九九四年）、六〇余年にわたる立正考古学の歴史を管見に入った資料と聞き書きメモを中心として簡単に展望しておきたいと思う。

二

「考古学研究遺物の蒐集も次第に数を加え今や書架三箇を応用して陳列してゐるが、それでも最早不足を感じている状態である」

右の文は、一九三三年に助手をつとめていた本田茂一氏が立正大学史学会の『会報』創刊号に執筆した「活気に満てる史学研究会の黎明」と題する動向より抜粋したものである。この年は、立正大学考古学会の発足年にあたり、当時の史学科の学生の関心の度合いを示すものとして興味深い。

この頃、陳列してあった遺物とは、久ヶ原遺跡（大田区）よりの出土土器を中心に、中国の考古学的資料（方格規矩鏡・神獸鏡・位至三公鏡・葡萄鏡・玉斧・五銖錢・蟻鼻錢・俑など）、朝鮮及び日本出土の古瓦、古墳出土の直刀などであったという。久ヶ原遺跡出土の弥生式土器は、住宅地造成の久ヶ原地域より発掘されたものであり、後に『弥生式土器聚成圖録』に収録されたほど識者に知られたものであった。

大学近傍の遺跡の発掘品に加えて、つぎつぎと寄贈品が加わり、意気が大いにあがっていた。その勢いもあって、考古学研究会は考古学会となり機関誌『銅鐸』の創刊号が発刊された。

しかし、原田淑人先生は、中国大陸などにおける調査研究の指導的立場におられたこともあって辞任され、専ら石田茂作先生の指導によって研究が進められるようになっていった。

『銅鐸』の発行は、当時の考古学界の状況と照らしあわせてみると、それはまさに新興の意気の発露として注目されるものであった。当時、全国学会として考古学会（現日本考古学会）の『考古学雑誌』、人類学会（現日本人類学会）の『人類学雑誌』、史前学会の『史前学雑誌』、東京考古学会の『考古学』のほか、大学関係の学会として國學院大学上代文化研究会の『上代文化』が発行されていたくらいであった。

創刊号には「巻頭言」が掲げられている。

「涯しない荒蕪の沙原に巨然と聳へ立つかのピラミッドを望んで、六千年前の燦然たる文化を偲ぶ者はカイロに遊ぶ遊客の凡てであろう。而しその頂上にかがやく一石を仰いで、同時に地上静かに冷たく横つてゐる多くの石を思

う人果して幾人あるであろうか。(中略) 按ずるに社会は複雑を極め、人事は煩多を加へ、自然は只神秘をささやくのみ、この間にあって吾人は何を為さんとするのであるか、銅鐸は人も知るその昔帝都の地たりし近畿の地を中心に今や各所に発見せられつつある。その形梵鐘に似て梵鐘に非ず、楽器の如くして楽器に非ず、而もそこには過去の人類の有せし無限の文化を蔵し、幾久しい間黙々として地中に埋没してゐた。彼果たして何を語るか。」
刊行に踏みきった関係者の感懐を読みとることができる文章である。

『銅鐸』の発行には、若き日の久保常晴先生の想いが込められている。先生は、北海道釧路の地から一九二八(昭和三)年に上京し、立正大学予科に入学した。郷土史の勉強から入った考古学の道を本格的に学ぶためであった。さきに触れた考古学懇談会・考古学研究会も先生が中核となって組織化したものであった。先輩によって史学研究室の陳列品として並べられた久ヶ原遺跡出土の弥生式土器も大きな刺激となったことはいうまでもない。一九三一(昭和六)年、文学部史学科に進学した先生は、早速に考古学会の結成に向っていった。一九三二(昭和七)年から、三四(昭和九)年にかけて刊行された立正大学考古学会編の『考古学入門』三部作(「石器時代之部・古墳時代之部・歴史時代之部」、日蓮聖人降誕会記念の「考古学会遺物展覧会」(一九三三―昭和八)年二月一六日開催)の開催なども、一九三三年一〇月に「標本室」に遺物の陳列場所が移されたのも久保先生などの尽力の賜物であった。

『銅鐸』は創刊号に続き、同じ年の一二月には早くも第二号が発行された。

一九三四(昭和九)年四月、史学科の副手に就任した先生は、『銅鐸』の刊行、展覧会の開催、遺跡の踏査のほか、金石文の研究に精出していった。

一九三五(昭和一〇)年一〇月に立正大学考古学会主催の「土偶土版展覧会」を開催し、考古学界の注目を浴びたのも先生の発案によるものであった。出品点数三〇〇点は当時としては驚くべきものであったと伝えられている。参

観者の名簿に鳥居龍藏氏をはじめ、有坂紹藏・上田三平・大野雲外・後藤守一・駒井和愛・島村孝三郎・竹下次作・直良信夫・中島利一郎・原田淑人・山内清男・和田千吉氏など、当時の考古学界の指導的立場におられた錚錚たる人達の名がみられる。この展覧会の出品者は杉山寿栄男氏のほか多くの研究者の協力をえる一方、記念の絵葉書も頒布され、まことに好評であり、『ドルメン』など関係雑誌に紹介された。

一九三六（昭和一一）年七月に助手になられた先生は、一九三七（昭和一二）年八月に東京高等女学校教諭として転じられるまで、『銅鐸』を六号まで発行する原動力となった。

立正大学を離れた先生ではあったが、その後も後輩の指導にあたり、一九三八（昭和一三）年二月一六日の日蓮聖人降誕記念として「古瓦展覧会」を開催した。柴田常恵・三輪善之助・篠崎四郎・石田茂作の諸氏よりの出品をえて盛大であった。出品の目録は『銅鐸』第七号（一九三八年六月刊）に掲げられているが、大場磐雄・太田静六・樋口清之・和田千吉氏などが来訪された。『銅鐸』第七号は、この展覧会を記念した「古瓦特輯号」として編まれた。石田先生の「榎先瓦考」、久保先生の「鎌倉・室町時代の瓦の名称」をはじめ古瓦関係の論文が掲載された。

その年、石田先生の指導を得て神奈川県都築郡新田村吉田（現横浜市港北区新吉田町）所在の板碑群の発掘調査が実施された。発掘された板碑は、嘉元三（一三〇五）年から永正一〇（一五一一）年にかけての紀年銘をもつものを含んだ一五四基であった。発掘は、三次にわたって行われ多くの考古学会員が参加して実施された。

吉田の板碑発掘が行われた昭和一三年は、国家総動員法が公布された年にあたり、戦時色が次第に濃くなっていった。この影響は、考古学会の活動にもあらわれ、この年を境として長く停顿の止むなきにいたったのである。

一九三〇年代、立正大学史学科に学び、石田茂作先生などの指導をうけて考古学の研究を意図された多くの人達の間には、太平洋戦争に際し散華された江本三郎・旭 寛行・本化呉郎・犬飼六男・寺嶋政義・小林存慈の諸氏の

名が記録に残されている。

三

一九五二（昭和二七）年二月、『銅鐸』第八号が久保先生執筆の論文二編を掲載して発行された。第七号の刊行以来、実に一四年ぶりのことであった。

立正大学考古学会は、一九四五（昭和二〇）年の終戦の年から数えて四年の後、千葉県千葉市築地台貝塚を発掘した。発掘はあくる一九五一（昭和二五）年にも継続され、縄文後期の小児甕棺などを発掘する成果をあげた。この発掘は、東京高等女学校教諭であった久保先生が立正大学の非常勤講師として出講されていたため、貝塚発掘の実習としての側面も有していた。この築地台貝塚をはじめとする考古学会の発掘は、当時、史学科の助手として勤務されていた丸子巨先生の主導により久保先生の指導によって実施されたのである。

一九五二（昭和二六）年より三年間にわたって実施された千葉県印旛郡（現佐倉市）長熊廃寺跡の発掘も久保・丸子コンビによって行われたものであった。長熊廃寺跡の発掘は、そこより白鳳様式の鎧瓦が出土し、さらに瓦塔の出土をみて考古学界の注目をうけるところとなった。発掘の結果、法起寺式伽藍配置を有するであろう、と考えられたことよって、該式伽藍の代表的寺跡例として多くの概説書などに登場することになった。

当時この発掘の成果を伝えた『日本経済新聞』は社会面のトップに「掘立柱、礎石無し、立正大考古班に凱歌」と大きな見出しをつけて報道した。

長熊廃寺跡の発掘成果は、『銅鐸』第九号（一九五三―昭和二七―年三月刊）に「特集・千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」と題し発掘参加者一五名が分担執筆して公けにされた。発掘調査から報告書の作成まで、石田茂作先

生の懇切な指導が行われたことはいうまでもない。

一九五〇年代（昭和二五～三四）の前半の状況は右の通りであったが、その後半に立正大学史学科に入学し考古学を学び卒業した筆者にとって、一九五四（昭和二九）年とあくる年にかけて発掘した埼玉県川口市石神貝塚（縄文時代後晩期）、一九五七（昭和三二）年以降、取り組んだ埼玉県比企丘陵の古代窯跡群の発掘調査についての記憶はいまに鮮明である。

『銅鐸』は、その後、第一〇号（一九五四―昭和二九―年八月刊）、第二一号（一九五五―昭和三〇―年一〇月刊）、第二二号（一九五六―昭和三一―年五月刊）、第二三号（一九五七―昭和三一―年七月刊）、第一四号（一九五八―昭和三三年―七月刊）と都合五冊を編集刊行した。とくに思い出が深いのは第一〇号である。この号は表紙と図版は活版印刷であるが、本文は謄写版印刷である。謄写の原紙は、当時、助手をされていた高嶋正人先生が切って下さった。それを史学研究室の演習プリント作成用の謄写版で印刷し、別に印刷した表紙と図版とともに製本屋に届けた。部数は確か一〇〇部に満たなかった。高嶋先生は『立正考古』誌の印刷も引きうけて下さり、立正大学考古学会にとって大変な協力者であった。次の第一一号から活版印刷に踏みきったが、印刷費の補助は、いつも高嶋先生がどこからか（？）工面して下さるのが常であった。

この頃、史学科では専攻を問わず、発掘調査には助手以下全員が合宿参加する習わしがあった。主催は立正大学考古学会であっても、実際は史学科生の実習の側面があったのである。

以上、一九五九（昭和三四）年までの立正大学における考古学研究の歩みの大要について記してきた。一九五〇年代に日本考古学協会の総会を本学において二回開催したこと、久保先生が東京高等女学校を辞められて立正大学の専任教授に就任されたことは、立正大学の考古学を、日本の考古学界のなかに位置付けたい、と願うわれわれにとって

喜ばしい出来ごとであった。

× × ×

一九六一（昭和三六）年には『立正大学考古学研究室小報』（現『立正大学考古学研究室彙報』第二八号迄刊）を創刊し、一九六七（昭和四二）年から一〇年間にわたってネパール王国テイラウラ・コット遺跡（推定カピラ城跡）を発掘調査したことは、立正考古学の歴史において記録されるべきことであろう。また、一九六九（昭和四四）年四月には、大学院文学研究科の国史学専攻が史学専攻に改められ、日本史専攻のなかに考古学専修がおかれるにいたった。その結果、全国の国立・私立大学の出身者がテーマをもって立正大学の大学院に進学してくるようになった。同時に留学生も増加し、博士・修士課程ともに考古学を専攻する院生数が多くなってきたのである。さらに一九七八（昭和五三）年一二月には熊谷校舎に考古学陳列室が開設され、校地内遺跡出土品のほか、埼玉県内出土品及びネパール王国の出土品も陳列されたことは、立正大学の考古学研究成果を公開する場としてきわめて有用であった。

一九九一（平成三）年四月、立正大学考古学会の機関誌『考古学論究』（B5判・一一〇頁）の創刊号が刊行された。長らく休刊していた『銅鐸』（A5判）にかえて、新装の新しい機関誌が誕生したのである。

いま、立正大学で考古学を学び、埋蔵文化財担当の行政官などとして活躍している者は三〇〇余名。北海道から沖縄県までほぼ全国に及んでいる卒業生は、大学・高中の教員、国公立の博物館の学芸員、公私立の研究所の研究員、県市町の教育委員会の文化財担当官、出版・報道などのジャーナリストなど多彩である。また、外国で遺跡の発掘調査に従事している者も少なくない。

一九三〇年に開始された立正大学の考古学研究について、一九五九年までを一つの区切りとして展望してきた。そして六〇年代以降についても若干の事柄について触れた。

一九六〇年代以後のことについては、筆者自身の研究生生活ともオーバーラップしている。いずれ改めて資料類を整えて書き続けることにしたいと思う。

現在、立正大学で考古学を学んでいる学生諸君とすでに学窓を巣立った卒業生諸君にとって参考となることを願います。乍らひとまず筆をおきたい。